

⑮ 『氣比松原の鳶』

愛発(あらち)を越え越前に入った。芭蕉が、余りにも貧しく侘しい浜の佇まいに思わず詠んだ句

『寂しさや須磨にかちたる浜の秋』の一句がミチの頭に浮かんだ。

句に詠まれたその色の浜に行ってみようと思った。ところが、浜への道を尋ねた人が、ことごとく無理だと言う。わけを聞くと

「道らしい道はねえし、行ったところで五々六軒の家があるだけでなくんもねえ。あそこは農地がねえから、昔からずっと五々六軒のままだ。ますほの小貝？爪の先ほどの貝殻だな。聞いた事はあるけどそんなもん探してなんになる。どうでも言うなら舟を頼むんだな。だけど悪い事は言わねえ、止めとくだよ。なくんもねえ。」

敦賀の岬の先端近くに有る村だ。舟を頼むと一朱はかかるだろうと言う。旅は始まったばかり。一朱の出費は大きすぎる。ミチは色の浜を断念し氣比松原に向かうことにした。

美濃の俳諧師から、愛発を越えたら氣比松原に行くといい、と言われていた。傘狂もそれを勧めた。琵琶湖周辺にも、粟津晴風で知られた松林があるが、比較にならない美しさだとか。

芭蕉も氣比神宮に参っている。師の足跡をたどることは願

わばこそ。色の浜が叶わないのならなんとしても氣比神宮に参らねば。

芭蕉は月夜をたのんで神宮に詣でたが、今はまだ時刻は午にはなっていないだろう。

山門の扉に大きく菊の御紋が浮き出ている。その脇を通り、氣比の神前に一礼をしたミチは、広い境内を抜けて松林に向かった。

なるほど、話に聞かされていたよりも遙かに松林は巨大で美しかった。

百年二百の樹齢を数えられそうな古木が枝を連ねて重なり合い、林の先は見通すことすら出来ない。

赤松が随分多いように見える。その樹下に他の草木は一切見えず、枯れ枝の散乱も無い。

散った松葉は所々に見えるものの、まるで誰かが掃き清めたようにも思える。手入れの行き届いた樹林の美しさに、ミチは思わず感嘆の声を漏らした。

少し離れた所に人影らしいものが動いている。よく見ると熊手で落ち葉を集めているようだ。矢張り毎日掃除の手が入っているらしい。

ミチは掃き掃除をしている人の脇を通り過ぎながら「お掃除ご苦労様です。毎日大変でしょう？」と声をかけた。

すると動かしていた手を止め、ミチを振り返った男が

「掃除ではない。藩の許しを貰ってほだ木を集めとる。松葉は火の点きがええし、小枝は火力も強いから。だけどたやないで。わしらもちゃんと藩に銭を収めとるのや。」

ミチは意外な話を聞かされて少し混乱した。氣比松原というのに氣比神宮ではなく藩にお金を払うとは。

しかもたかが落ち葉ではないか。それに松原は神宮の所領ではないのか。

「何でも昔、織田信長が越前に入った時に、氣比神宮も氣比松原も所領を没収されたんじやそうな。今松原は小浜藩領になつとるんで、わしら近在の者は、ほだ木を貰う代わりに小浜藩に銭を収めとるいうわけや。」

そうだったのか、とミチは納得した。近在の者達は、ほだ木が欲しい。藩はほだ木を取ることを許す代わりに金を徴収し、同時に松林の美化も保たれている。

小浜藩の抜け目の無さに目からうろこが落ちる思いで、ミチは松林を抜け砂浜に出た。

浜に出たミチはもう一度感嘆の声をあげた。見通したところ、半里はゆつくりあると思われる白砂の帯が、緩い弧を描いて東西に延びている。その前には紺碧の海が広がり、後ろには、今抜けて来たばかりの深緑の松林が遠くく続いていた。

北陸の常として明日の天気は測れない、と宿の主に言われ『名月や北国日和定なき』と詠んで月夜を幸いに神宮を訪れ、

松林を散策し、霜を置いたような砂浜に感動した芭蕉であったが、ミチは今、澄み渡った空の下に両の手を拡げて、潮の香りを胸一杯に吸い込んでいた。

思いつきり両手を空に向けて突き上げ、出来ることなら目の前のこの景色を独り占めにしたいたいものだ、そう思った。

まだ見ぬ三保の松原もこのようだろうか、と想像を巡らせ、思いついてこの景色の中でお昼にしよう、と背中を降ろした。

砂の上に腰を降ろすと、今朝、宿で準備をして貰った竹皮に包まれた握り飯を膝の上に乗せ、水が入った竹筒を取ろうと横を向いた瞬間、ばさつ、と大きな団扇で煽がれたような強い風を感じた。

何事だろうと顔を上げたミチの目の前を、大きな鳶が飛び去るところだった。

何が起ったのかすぐには理解できなかったが、気付けば膝の上の握り飯が消えていた。